

豊田地区出土の木製品について

樋上 昇・永井邦仁・木川正夫

平成10・11年度にかけて発掘調査をおこなった豊田市本川・水入の両遺跡から、5世紀前半代を中心とする木製品が出土した。これらは当該期の資料としては愛知県内でも数少ないものである。特に曲柄平鍬・二又鍬・三又鍬は伊勢湾型の終末期にあたるものとして、古墳時代前期と中期の木製品の形態・組成をつなぐきわめて貴重な資料である。

1. はじめに

愛知県埋蔵文化財センターでは、第二東海自動車道建設にともない、平成9年度から豊田市南部地域において発掘調査をおこなってきた。そのうち、平成10年度調査分の本川遺跡、同10・11年度調査分の水入遺跡では、いずれも5世紀代を中心とする集落を確認した。そして、これらの遺跡でみつかった複数の溝から、5世紀前半から中葉にかけての多数の木製品が出土している。これまで、西三河地域に限らず愛知県内全体を見渡しても、この時期の木製品の出土例はほとんどなく、きわめて貴重な資料といえる。しかし、両遺跡の正式な報告書の刊行はまだ数年先になるため、早急な資料の公開が必要であると判断し、小論で報告することとした。ただ前述のように、報告書の刊行までまだ間があることから土器等の遺物整理がほとんど進んでいないため、以下に紹介する木製品の出土遺構についても所属時期が若干前後する可能性があり、小論で述べる時期はあくまでも調査時点における見解である。

また、両遺跡は規模・立地などの点で若干の違いはあるが、出土木製品については特に各遺跡の特徴をしめす(たとえば祭祀関連など)ものは



図1 遺跡位置図



図2 本川・水入遺跡位置図(1:50,000)

少なく、むしろ相互補完することによって5世紀前半～中葉頃のこの地域で使用されたごく一般的な木製品の組成を復元できるものと考え、両遺跡からの出土資料をあわせて、用途ごとに分類し記述していくこととしたい。

なお、樹種同定は平成10年度出土分についてのみ、元興寺文化財研究所でおこなった。

2. 本川遺跡の概要と木製品出土遺構

本川遺跡は、豊田市の南部、永覚町大正および本川に所在している。地形的には碧海台地の段丘崖から約300m南の矢作川中流域によって形成された沖積地に立地する。調査面積は15,500㎡で、調査区は段丘崖に平行して北東方向から南西方向に設定され、南から98A～D区の4調査区にわかれている。出土遺構は大きく3時期にわけることができ、中世～近世の遺構は全調査区、弥生時代中～後期および古墳時代中期(5世紀前半～中葉)の遺構は98A・B区で確認している。

古墳時代中期の集落は、碧海台地の段丘崖から南へのびる低い尾根上の微高地に展開している。調査区内における微高地の東西幅は約130m

で、遺構検出面の標高は約19mをはかる。微高地の両端は谷状の地形となり(図2のトーン部分)東側の谷寄りでは特に溝などの区画施設はなく、谷の落ち際まで竪穴住居が築かれている。一方、西側では谷の方向に沿って4～5条の溝を確認した。うち、SD01からは集落内の竪穴住居と同じく5世紀前半から中葉にかけての土器が多数出土しており、特に溝の中央部付近からは少量の滑石製模造品とともに手捏ねのミニチュア土器が数点出土した。最も西よりのSD29は南側のみ再掘削されており、なかから大量のドングリが出土している。この溝からは時期を決定しうる遺物がほとんど出土していないが、土層の堆積状況などからSD01とほぼ同時期である可能性が高いと判断している。なお、本紀要の飴谷・佐藤論文に掲載されている鳥形木製品はこのSD29より西側の浅い窪地から出土した。また、SD02・03・28からは集落と時期の異なる廻間式併行期の遺物が出土している。小論で紹介する木製品の大半はSD01からの出土で、これにSD02とSD29出土品が若干付け加わる。(樋上)

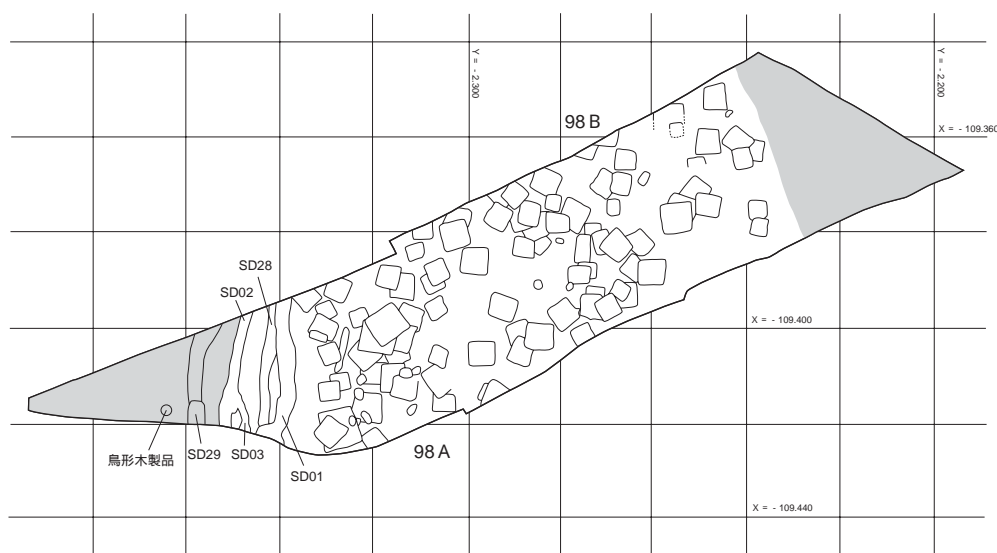


図3 本川遺跡遺構配置図 (1:1,600)

3．水入遺跡古墳時代の概要

水入遺跡は、豊田市渡刈町下糟目・大屋敷にある、矢作川西岸の低位段丘上に展開する旧石器から江戸時代まで続く複合遺跡である。そのうち、古墳時代に属する遺構は、遺跡中央の谷地形より南側を中心に展開しており、木製品が出土した遺構は矢作川に面する高さ約2.5mの崖とそれに平行に掘削された全長約230m、幅5m、深さ4mの大溝である。これら崖と大溝に挟まれた約10,000㎡の空間では、当該期の竪穴住居は一辺7mの大型のものを中心に数棟あるのみで、あとは掘立柱建物がいくつか想定される程度である。したがって本川遺跡のような集落景観とは大きく異なる。また、崖や大溝への土師器の大量廃棄や祭祀関連遺物から、祭祀的性格の強い特殊な場であったと考えられる。ただ、木製品に限ると、祭祀具と特定できるものよりもはるかに多くの農具類が出土していることも特筆される。

矢作川に面する崖では、尾張地方の編年で松河戸式併行の高杯・小型丸底壺を中心とした土師器が大量に廃棄され、そのなかには手捏ね土器が含まれている。木製品はこれらと同一層から出土しており、木製品の他に自然状態の樹木が多く出土している。それらは樹木の様々な部位であるが、一部のものには表面に焼け焦げ痕がみられる。一方木製品のほとんどには焦げが認められない。なお、出土地点は崖下の各所に散在し特にまとまりをみせることはない。

大溝においても崖同様、松河戸式併行段階の層位で自然状態の樹木と木製品が混合した状態で出土している。土師器以外には、剣形石製模造品・白玉・管玉や、今回図示しえなかったが刀形木製品（全長55cm）が出土しており、祭祀後に大溝に投棄されたものと考えられる。

なお、小論では、平成11年度上半期までに出土した木製品について図を掲載する。その後出土したものについては極力本文中で触れるようにした。（永井）

4．出土木製品

（1）農具・工具類（図5）

1は伊勢湾型の曲柄平鍬。刃部下半を欠損し、残存長34.3cm、軸部長17.0cmで、刃部最大幅は7.5cm。軸部は上端付近の後面側（曲柄装着面の反対側）に一条深い溝を刻んでおり、筆者の分類（樋上2000）ではD類にあたる。刃部の平面形は軸部と刃部の境に明確な肩部をもたず、刃部幅がきわめて狭い類に属する。側面形は伊勢湾型曲柄鍬に特徴的な刃部後面側上半部からの削り込みが弱い。樹種はクヌギ節。本川遺跡SD01出土。

2は伊勢湾型の曲柄三又鍬。刃部下半と左側を欠損し、残存長27.2cm、軸部長は14.0cm、刃部幅は3.7cm。軸部形態は1と同じくD類。軸部後面側全体に縦方向の加工痕を明瞭にとどめる。軸部最下端には紐ズレ痕とみられる浅い溝状の痕跡を残す。刃部の平面形はやはり明確な肩部をもたない。側面形でも刃部後面側上半部からの削り込みは弱い。樹種はアカガシ亜属。本川遺跡SD29北半出土。

21

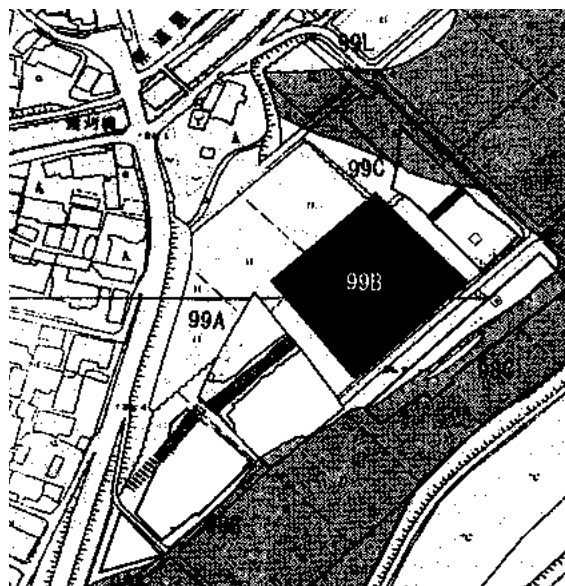


図4 水入遺跡南部の古墳時代主要遺構配置図
（1：4,000）濃いトーンは崖下にあたる

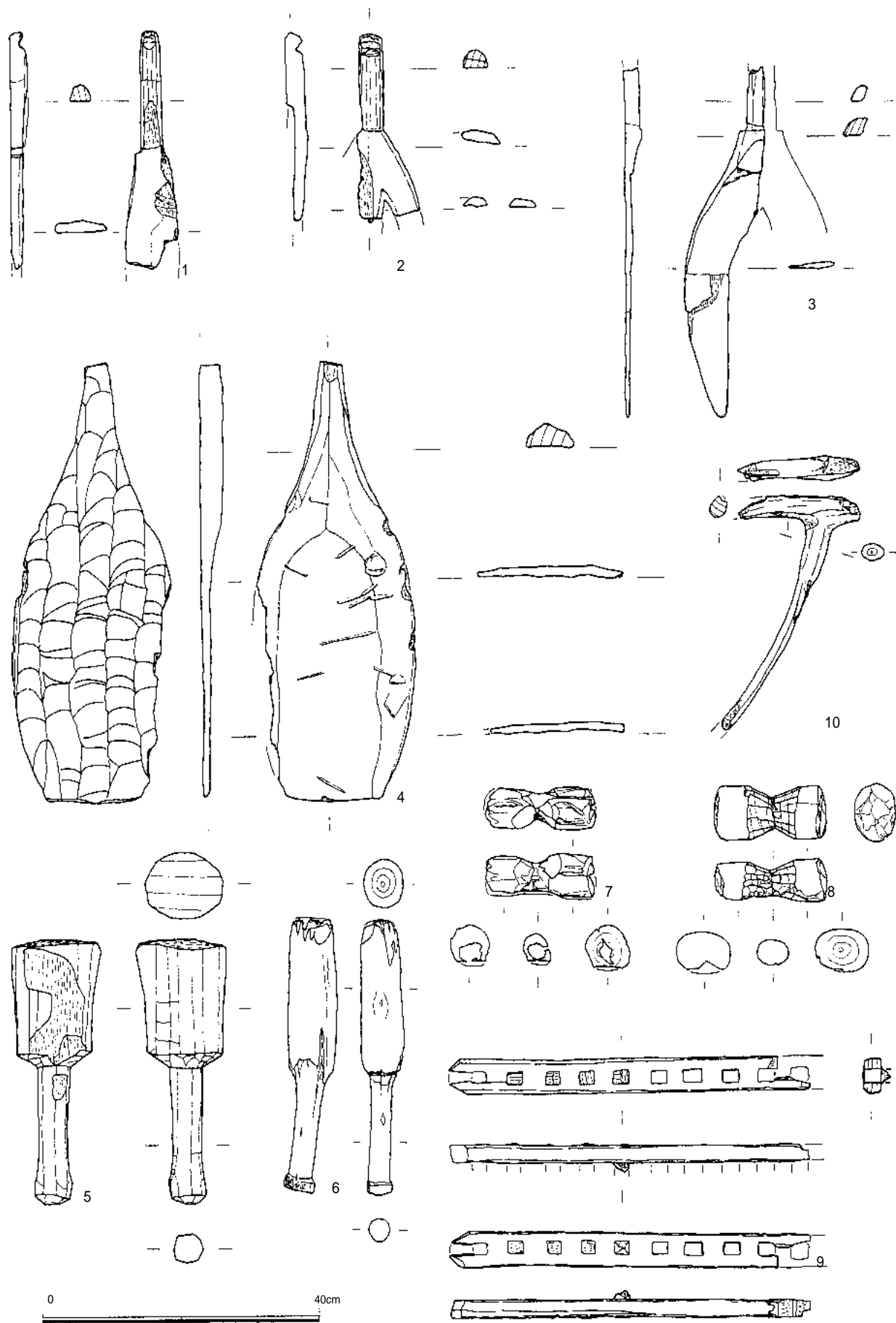


図5 農具・工具類 (1:8)

3は伊勢湾型の曲柄二又鋤。軸部上半と刃部の右側約半分を欠損する。残存長50.6cm、軸部残存長9.2cm、刃部長(又部から下)29.9cm、刃部最大幅6.4cm。刃部の平面形は肩部をもたず、最大幅がほぼ中央に位置する類。側面形では刃部後面側上半部からの削り込みが上記2点とは異なり、きわめてしっかりとおこなわれている。樹種はアカガシ亜属。水入遺跡崖下中層出土。

4は伊勢湾型曲柄鋤の未成品。全長64.25cmで、刃部の一部を欠損しており、最大幅は21.2cm。平面形は軸部から肩部にかけてゆるやかに広がり、刃部下端付近で若干すばまる。前面側は軸部から刃部にかけて縦方向の鉄製工具による加工痕(手斧痕)がきわめて明瞭に残る。加工の手順は軸部側から刃部側へ、さらに右から左へ進行し、加工工具の幅は4.2cm前後であることがわかる。側面形では刃部後面側上半部からの削り込みがしっかりとおこなわれている。その平面形からみて、二又鋤が三又鋤の未成品とおもわれる。樹種はアカガシ亜属。水入遺跡大溝出土。

5・6はヨコヅチ。5は全長38.5cm、敲打部長18.7cm、敲打部径13.0cmで、渡辺誠氏の分類によるAタイプ(ワラ打ち等用)にあたる(渡辺1985)。敲打部・柄部ともに加工痕を明瞭にとどめている。水入遺跡大溝出土。6は全長40.0cm、敲打部長22.6cm、敲打部径7.0cmで、渡辺分類のBタイプ(豆打ち等用)である。樹種はヒノキ。水入遺跡崖下最上層からの出土で、時期は8世紀頃と推定される。

7・8は木製錘(ツチノコ)。7は残存長16.0cm、最大径6.3cm。水入遺跡崖下出土。8は全長16.3cm、最大径7.7cm。水入遺跡大溝下層出土。両者とも中央部がくびれるタイプで、渡辺誠氏の分類ではYf型第3群にあたり、ムシロ編み等用と推定される(渡辺1983)。いずれも樹種はクリ。

9は鉄斧の柄。残存長33.8cm、台部残存長17.2cm、台部最大幅3.5cmで、台部と柄部の先端はいずれも欠損している。台部の形態からみて

袋状鉄斧(縦斧)の柄と考えられる。樹種はヒノキ。本川遺跡SD01下層出土。

10は杵型田下駄(大足)の縦杵材(上原1993)。残存長52.0cm、高さ5.2cm、厚さ2.6cmで、10箇所ある横棧挿入孔のうち、4箇所に横棧の一部が残る。水入遺跡大溝出土。(樋上・木川)

(2) 容器・雑具類(図6)

本川遺跡では食器数点・机天板が出土し、水入遺跡では崖下から盤・箱の一部が出土した。

11・12は本川遺跡SD02下層出土で、11は、復元口径24.8cm、高さ3.2cmの皿。12は、復元口径26.0cm、高さ1.8cmの皿。ともに樹種はヒノキ。いずれも刳物か挽物から判別しづらい。なお、SD02は廻間式併行である。

13・14は盤で、13は水入遺跡崖下出土で、推定長43.0cm、幅24.0cm、高さ4.8cmである。底面は平滑であるが、内面は凹凸が激しい。樹種はヒノキ。14は本川遺跡SD01出土。高さ3.8cmで、全体的に非常に平滑な状態を保っている。樹種はヒノキ。

15は水入遺跡崖下出土の箱の一部である。樹種はヒノキ。箱部材は大溝でも出土している。

16は本川遺跡SD01出土の組み合わせ式の机の天板である。表面には刃物でつけられたような線状のキズがある。樹種はヒノキ。

(3) 建築部材・用途不明品(図7)

本川遺跡では、焼失した竪穴住居が確認され、そこから部材が出土しているが、今回は図示していない。水入遺跡では崖下と大溝から高床建物に関わる建築部材が出土している。なお、矢板状に加工された土木に関わる木製品もここに含めた。

17・19は水入遺跡大溝出土である。17はほぼ完形の板材で、長さ140cm、幅14cm、厚さ4cm。両端部を中心に削り痕を残す。両端が摩耗し丸みがある以外、良好な状態である。中央より少しずれた個所の長方形の穿孔はホゾ穴か。樹種は針葉樹。19は17より若干薄い板材で、一端が摩耗し丸みがある。矢板とみられる24にも同様の圧痕があり、19も矢板に使用されたのかもしれない。

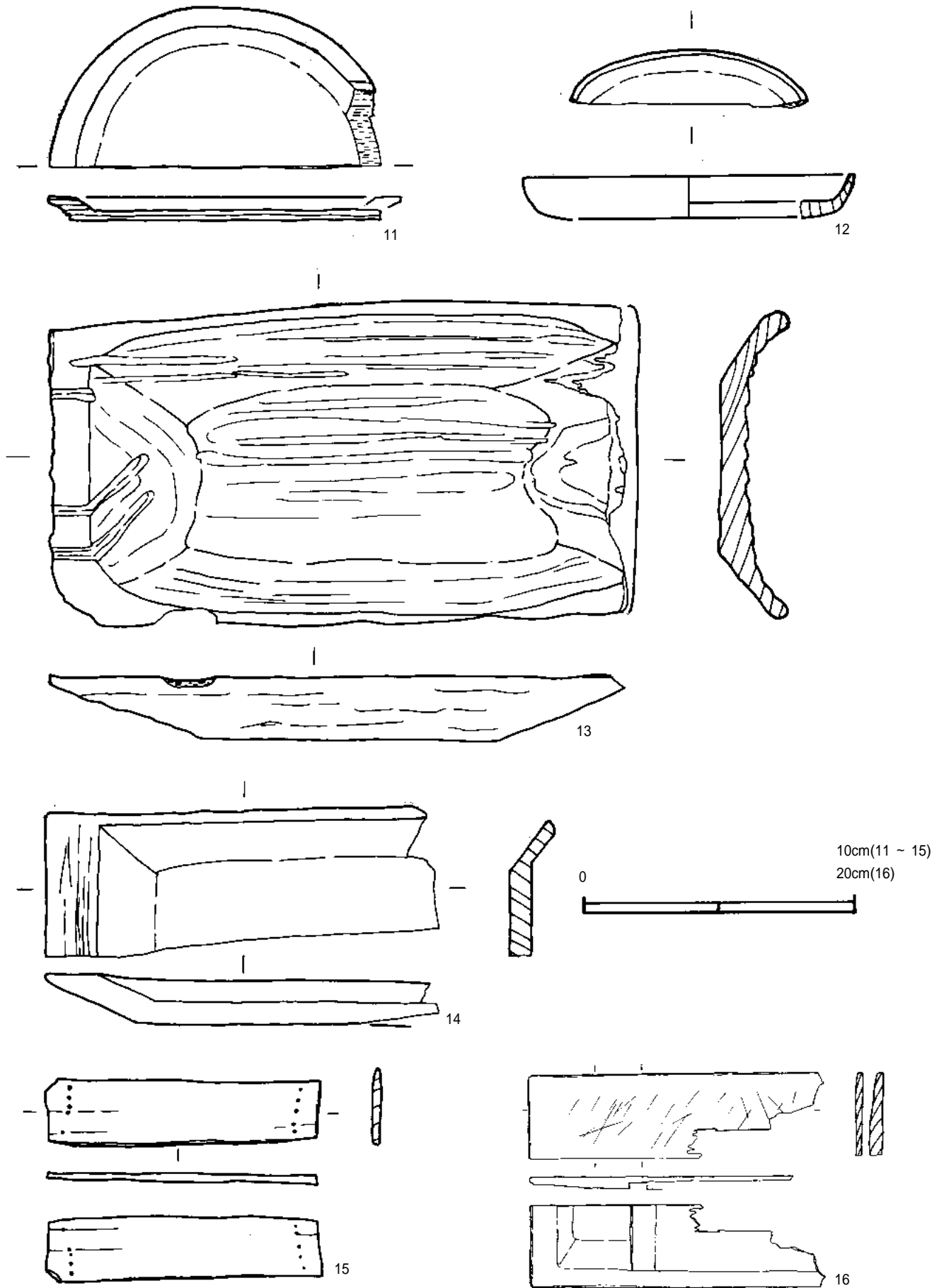


図6 食器・容器(1:4) 雑具(1:8)

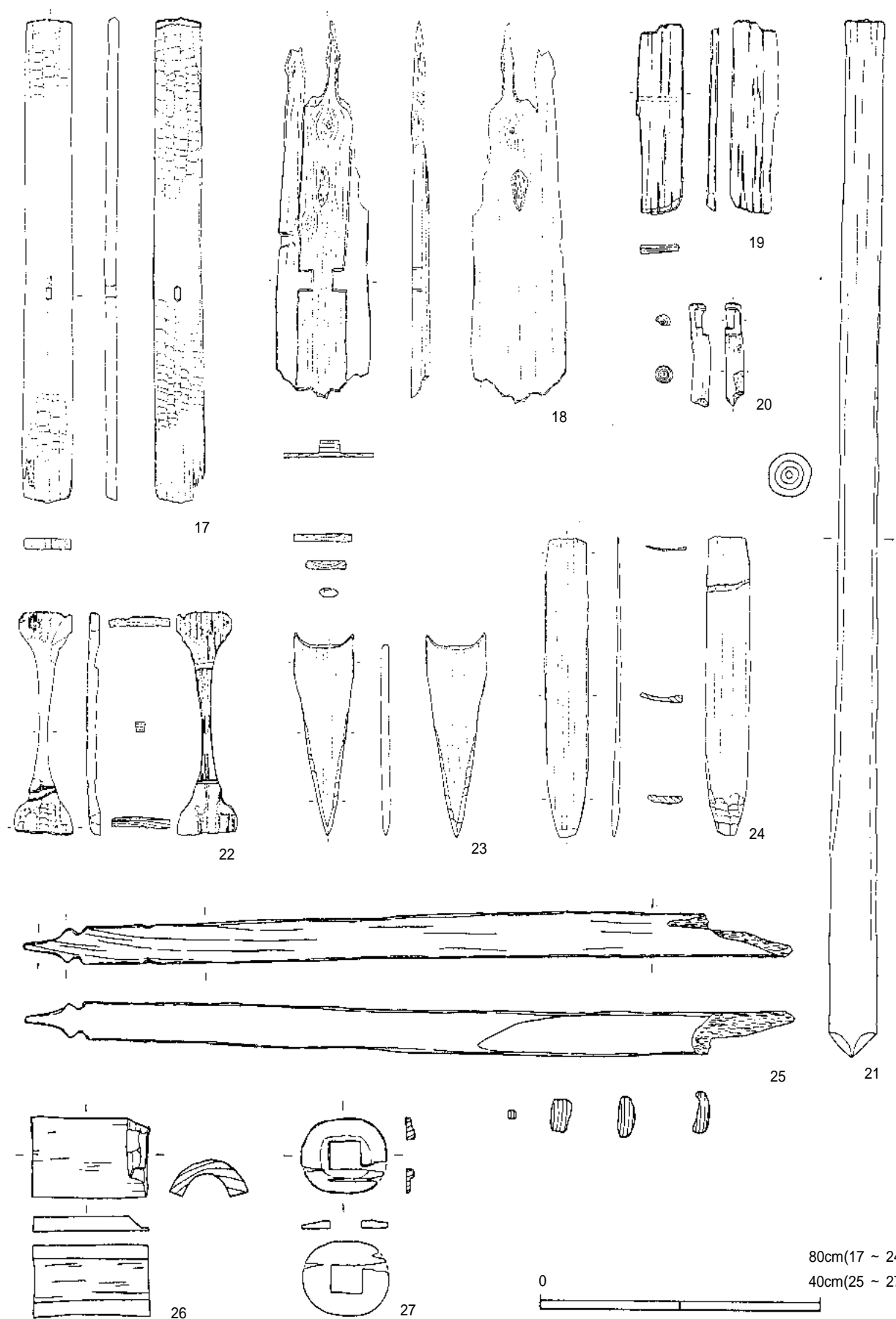


図7 建築部材(1:8)・用途不明品(1:16)

18・21・22は崖下出土で、それぞれ離れた地点である。18は一木から片面を凸状に削りだし、一部細く削りだされた個所がある。「屋根型木製品」と称される戸口関連の部材（松岡 1999）に似ているようであるが、ここでは保留しておきたい。樹種はクリ。21は全長290cm、直径10～15cmの円柱である。一端がくさび形に加工され、もう一端は継手のための直径4cmの円形のホゾ穴があり、そこに別材のホゾが刺さった状態である。樹種はマキ。22は扉板の把手部分と推定される。バチ形に開いた部分で扉本体とつながっていたようであるが、剥離してしまったらしい。細い把手部分の中央は使用により凹み、把手部分と剥離面の境に幅約2cmの窪みがあり摩耗している。ここを門が通ったのであろうか。扉把手の類例からするとかなり繊細な造りである。樹種はヒノキ。

20は本川遺跡S D 02下層出土の部材の組み手部分である。材の直径は5cm。同じ個所に方向を違えて2つの組み手加工がなされるが、前後関係は不明である。樹種はモミ。

23・24は水入遺跡崖下出土である。矢板と推定している。特に23は何らかの板材からの転用の可能性が考えられる。水入遺跡ではこういった矢板の他に杭が崖面や大溝壁面に刺さった状態で10点近く出土しており、崩落防止にしがらみを要所に設けていたようである。樹種はいずれもヒノキ。

用途不明品（25～27）は一見して用途の判別がつかないものである。

25は水入遺跡大溝の出土で、17・19の付近である。全長110cm以上あり、卒塔婆が肉厚になったような印象である。樹種はカヤである。仮に装飾的な形状の部分を上にとすると、下方に向かってより扁平になっていく傾向がある。実用的な道具とは考えにくく、祭祀具あるいは建築の装飾の可能性を考えたい。26は本川遺跡出土の丸瓦のような形状をした木製品である。破断面はなく完形品である。一端を斜めに粗く削った痕跡があるが、この目的も含めて用途は不明である。樹種はカヤ。27は水入遺跡崖下出土の円盤

状木製品である。形状は鼠返しであるが、建築に使われるそれに比べてはるかに小さい。何らかの部材としか言いようがない。樹種はヒノキ。

前述のように、水入遺跡の大溝からは高床建物に関わる建築部材が数点あるが、延長約10mの範囲内で出土している。図示したものの以外に板材が2点、一木造りの梯子が1点出土しており、柱部材は全くみられない。したがって具体的な建物上屋構造を復元するには絶対数が少ない。ところでこの出土地点の約5m東側の段丘上で、同時期とみられる掘立柱建物（5間×3間総柱）が確認されており、建物解体後すぐ近くの溝に廃棄ないしは水漬け保存したならば、この建物に使用されたものと推定できよう。一方、崖下出土の部材は出土位置が散在しているものの、高床建物の存在を示す重要な資料であることに変わりがない。（永井）

5．まとめにかえて

最後にまとめにかえて、本川・水入両遺跡から出土した木製品のうち、特に農耕具類（曲柄鍬）について、その編年的な位置づけをおこなっておきたい（図8）。

筆者（樋上）はこれまで、濃尾平野を起源とし、古墳時代前期から中期にかけて東日本の各地域に広く分布する東海系曲柄鍬について、いくつかの論考を発表してきた。最近では東海系曲柄鍬のうち、伊勢中部から西遠江までの伊勢湾周辺地域に分布する一群を「伊勢湾型曲柄鍬」とし、形態的特徴と変遷についてまとめた（樋上2000）。その伊勢湾型曲柄鍬の特徴をかいつまんで述べると、以下の4点に集約できる。

- 1．器種は平鍬・二又鍬・三又鍬がある。
- 2．膝柄との緊縛用に、軸部後面側の上端付近に深い溝を一条刻む。
- 3．刃部後面側を上半部から下半部にかけて強く削り込む。
- 4．軸部・刃部ともに前面側はきわめて平坦に仕上げる。

伊勢湾型曲柄鍬の出現時期はほぼ廻間 式期

	曲柄平鍬	曲柄二又鍬	曲柄三又鍬
廻間式期	<p>類</p> <p>1 勝川</p> <p>2 北道手</p> <p>3 勝川</p>	<p>類</p> <p>3 勝川</p>	<p>4 八王子</p>
松河戸式期	<p>類</p> <p>5 月縄手</p> <p>6 トメキ</p> <p>7 本川</p>		
松河戸式期	<p>7 本川</p>	<p>類</p> <p>8 水入</p>	<p>9 本川</p>

図8 濃尾平野における伊勢湾型曲鍬編年試案(1:8)

初頭頃である。終末時期についてはこれまで、5世紀後半頃(宇田式前期)にはU字形の鉄製刃先を装着するナスビ形曲柄平鍬が出現するため、それ以前であろうとしかいえなかったが、小論で紹介した本川・水入両遺跡からの出土例によって5世紀中葉頃(松河戸式期)であることが判明した。そして、これらの資料を組み込むことによって、濃尾平野および西三河地域での曲柄鍬を～類に分けて、刃部の平面形態の変化から、以下のような変遷を述べるようになるようになった。

類(廻間～式期): 平鍬・二又鍬・三又鍬ともに刃部上端にはしっかりと斜めに削り込んだ肩部をもつ。平鍬は上半部から下端までほぼ一定の刃部幅である。二又鍬も刃部幅は上半部から下半部までほぼ一定で、刃部の平面形は長楕円形となる。三又鍬は完形品がなく、不明。

類(廻間式～松河戸式期): 平鍬は肩部を省略し、刃部の平面形は下ぶくれとなる。二又

鍬・三又鍬ともに濃尾平野ではまだ類例がないが、静岡県東部以東に分布する東海系曲柄二又鍬類は平鍬同様、肩部がなくなり、下ぶくれで刃部下端付近に最大幅がくるようになる。

類(松河戸～式期): 平鍬は類に較べて刃部幅が極端に狭くなり、刃部長は著しく長くなる。二又鍬は刃部中央付近に最大幅がきて、平面形は菱形に近くなる。三又鍬は類と比較して、なで肩になるが、全形は不明。

以上、本川・水入両遺跡から出土した農耕具(曲柄鍬)の編年的な位置づけについて述べてきた。これからそれぞれの報告書作成にむけて、その他の木製品についても研究を進めていきたいと考えている。(樋上)

小論を作成するにあたり、次の方々にお世話になりました。記して感謝いたします。

佐藤公保・平野昌子・元興寺文化財研究所
(敬称略)

参考文献

- 浅野 清 1969 『奈良時代建築の研究』中央公論美術出版
- 上原真人 1993.3 『木器集成図録 近畿原始篇(解説)』奈良国立文化財研究所
- 樋上 昇 2000.1 「東海系曲柄鍬再論」『考古学フォーラム』12 考古学フォーラム
- 松岡良憲 1999.5 「和歌山県鳴神遺跡出土の『屋根型木製品』について」『光陰如矢』「光陰如矢」刊行会
- 渡辺 誠 1983.3 「御山千軒遺跡出土木製品の民具学的研究」
『東北新幹線関連遺跡発掘調査報告』福島県教育委員会・日本国有鉄道
- 渡辺 誠 1985.3 「ヨコヅチの考古・民具学的研究」『考古学雑誌』70-3 日本考古学会